

開 高 健 著

過去と未来の国々

— 中国と東欧 —



岩 波 新 書

413



開 高 健 著

過去と未来の国々

—中国と東欧—

岩 波 新 書

413

開高 健

1930年大阪市に生まれる

1953年大阪市立大学法学部卒業

著書—「日本三文オペラ」「裸の王様」
「ロビンソンの末裔」「屋根裏の独白」
「声の狩人」(岩波新書)

過去と未来の国々

岩波新書(青版) 413

1961年4月20日 第1刷発行 ©
1967年8月10日 第8刷発行



著 者 かい こう たけし
 開 高 健

東京都千代田区神田一ツ橋2-3
発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都新宿区改代町24
印刷者 田 中 昭 三

発行所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
 神田一ツ橋2-3 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

理想社印刷・桂川製本

はしがき

雑誌『世界』に連載したものをまとめたものである。一冊にするにあたっていくらか削った個所があるけれど、それはこの判の本の枚数のための工夫で、他意はない。外国から送った原稿もあり、帰国してから書いた原稿もあり、それも、手帖やタバコの空箱や、ちり紙、劇場のプログラムのはしなどに走り書きしたものをもとにしていることが多いので、いま読みかえしてみると、重複、矛盾、速断、誤解、情緒過多などと感ずることがたくさんあるように思うが、あえてなおさずにおいた。

中国へいったのは「文学代表团」の一人としてであったけれど、時期が時期なので文学らしい文学の話はほとんどせず、たくさんの方文学者に会いはしたが日程は政治に終始した。文章家すなわち経世家という観念は中国の古代からの伝統で、「社会主義リアリズム」の要求の基礎もまた一つにはそこにあると思える。ただ、当時、私は文学の話をする時間のないことにつよい不満を抱いていた。疲れたり、倦んだりもした。そう感じたときは、そのように書いた。しかし、同時に私はまたたいへんな特権の機会にもめぐまれたのである。ほかの時期にいったのではとてもかいま見られないような中国の表情というものを眺めることができたし、毛沢東をは

じめとする指導者たちの意見に親しく接することもできたのである。この紀行文のなかには毛沢東と陳毅の談話をのせておいた。注意深く読んでいただいたら彼らの対外、対内のいろいろな問題についての微妙な姿勢が見られるのではないかと思う。また、安保闘争当時の日本と日本人を外から眺めた場合の印象ということもある。もう一度ふりかえっていただく材料になればたらと思う。中国をもふくめて諸外国の、この運動に対する表情を誰かが記録しておかなければならないと思って『人民日報』や『新華社通信』の外電リフレットを毎日チェックすることにかかった。それも、いわゆる「東」側の体制の諸国ばかりでなく、「西」側の諸国のも手に入れようと努めた。けっして茅台酒ばかり飲んでいたわけではないのである。

東欧諸国は中国を見た眼ですぐいったので、私はそこにある「安定」の表情を、つい、「沈滞」とうけとってしまう誤ちをおかした。その感想をしばしば書いた。安定と沈滞は見る人によってどちらにでもとれる、きわめて弁別のむづかしい表情だが、それにしても私の書きかたはすこし断定的すぎたように感じている。もし中国を見ていないでこれらの国を眺めたらどうなっただろうかと、思わないではないのである。けれど、つぎのことだけはいえるのではないかと思う。これら諸国における物質面での社会主義の成功は、過去のそれらの国々の悲惨さと対照すればどんな反共主義者でも認めざるを得ないのである。そこで反共主義者は躍起になって、自由がない、ということにとびつく。西側にどんな自由があるか、その自由はどんな質のものか、ということについての精密な反省より、その誹謗の声はより性急であり、より辛辣で

ある。たしかに自由は少ない。チェコに見る例はその物質面での成功の高さにくらべると不可解とっていいほどである。たしかに、自由は、まだ、少ない。しかし、この世界を流動するものとしてとらえるか、不動の秩序のうちにおいてだけでしかとらえようとしないか、その二つの姿勢のうちどちらをとるかで、この問題はまた変る。文学についていえば後者の姿勢は自然主義のなかに読むことができるのではないか。そしてそのもたらした毒を私たちは知りすぎるほど知っているのではないか。文学ばかりか、生活の思想においても、また……

自由はおなじ社会主義体制のなかでも東欧諸国ではまったくさまざまな表情においておこなわれつつある。チェコでは暗黙のうちの禁書同然になっているある種の文学書が夜汽車でわずかに一晚の距離のポーランドでは氾濫しているといつてよいほどよく読まれている。ルーマニアにはルーマニアの表情がある。中国にはまた中国独自の背景とそれが生みだした表情がある。社会主義もまた伝統や歴史や民族感情の規制をうける多様な文明なのである。

スターリンの暗影からの解放は各国において緩急さまざまである。しかし、それは、とにかく急速にうごきつつあり、ひらきつつある。東欧諸国は過去の悲惨な分裂と被圧迫からぬけだして、ようやく総合と展開にのりだし、若い実験を開始した。彼らはアジア、アフリカの諸国が新しいという意味では新しくないが、やはり、若いのである。そうなったばかりなのである。私がかいま見た表情は一九六〇年の数カ月であるが、数年後にどんな表情があらわれるかは誰にも想像できない。中国についても同様である。だから、この紀行文はあくまでも一人の、不

用意な、知識不充分の、小説家の、暫定的な現実についてのスケッチにすぎないのである。その気持からこの本の表題もきめた。

さて、これらの旅行の最終的なつぶやきは、私にとっても、また、一つである。
「ところで、日本は？……」

一九六一年三月

開 高 健

目 次

はしがき

中 国	1960年5月30日～6月6日	1
中 国	1960年6月7日～6月15日	35
中 国	1960年6月16日～6月18日	65
中 国	1960年6月19日～7月6日	91
ルーマニア	1960年9月	123
チェコスロヴァキア	1960年10月	151
ポーランド	1960年11月	179

中 国

— 1960年5月30日～6月6日 —



朝の出勤前、北京の公園の広場で労働者たちが拳法の型をしてあそんでいた。青竜刀をふっている者もあった。

5月30日 二三時四五分発のインド航空。

5月31日 香港の九竜飛行場についた。

通関をすましてからバスで駅に向かった。駅からは汽車で国境の深圳まで一時間ほどかかるのである。羽田から香港までが約八時間だから、九時間そこで中国へ入れることになる。ジェット機が東京―北京間を飛ぶとなると三時間ほどで行けるそうだから、まったく地球は小さくなった。この空路が早くひらかれるといい。

正午ちかくに国境についた。だいたい「国境」と聞けば、ハリウッドの住人にかぎらず人はロマンティズムをかきたてられて、なにがしかの物語なりイメージなりをでっちあげる習慣を持っている。おまけにそれが島国の住人であってみれば、地上にひかれた一本の気まぐれな線のために血みどろの抗争が起るといふのがどういふことなのか皮膚にピンとわからないものだから、いよいよ興味が起ってきた。で、私は汽車からおりてはげしい南国の日光のなかへ歩きだしながら、なんとなく

(……さて、さて！)

眼を皿のようにした。

汽車はゆるやかな丘陵地帯に入って小さな駅にとまる。六月の日光が静かにそそぎ、小さな川が流れている。その小川が、つまり、国境である。川のこちら岸に小屋があつてイギリス人の士官が腰にモーゼル拳銃をぶらさげて旅券認証のためにタイプライターをたたいている。川には鉄橋がかかり、鉄橋の線路のあいだには板が敷いてあつて、そこを一行縦隊になつてわたつてゆくのである。中国側の岸には解放軍の士官がだぶだぶの青ズボンにカーキ色の軍服、鉢のひらいた軍帽、そこへ肩からピカピカに磨きあげたマシン・ガンをさげてたっている。鉄橋のしたの川は澄んで速く流れ、藻がゆらめき、陽はかがやいて、茂みはカンナの花の香りがする。靴のしたで板がコトコトと音をたて、解放軍の士官が微笑してパスポートを眺め、

「ニイ・ハオ！（こんにちわ）……」

つつましやかに握手をもとめた。

それだけだ。これで私は「国境を越えた」ことになるわけだ。禁じられたのは写真をとることだけである。なんだかもの足りないけれど、こんなところはもの足りないにこしたことはない。モーゼル拳銃やマシン・ガンは見ただけで心臓が冷える。

鉄橋をわたったところで三人の人が待っていた。握手をし、挨拶をすませ、食事をしてから汽車にのることになった。広州（広東）へいくのである。汽車は最後尾の箱で、「瞭望車」といつて展望車のことである。革張りの安楽椅子が窓ぎわにずらりとならび、小卓が一つずつついていて、植木鉢がおいてある。お下げの少女がストラックスをはき、三〇分ごとに魔法瓶に湯を

入れてめいめいの小型ジョッキほどの茶碗についでまわってくれる。

（二等でも三等でもお茶がでる。寝台車でもおなじである。お茶の葉は二銭ほどだして小さな紙袋に入つたのを買うと、お湯代がそのなかに入っていて、いくらでもついでにつてくれるのである。旅行する人のなかにはリュック・サックやシヨルダー・バッグなどに紐で茶碗をくくりつけている人もいた。中国人のお茶好きは日本人以上である。生水がのめないから真夏で汗を流しながらも舌の焼けるようなお茶を吹いて飲んでゐる。なお、植木鉢は三等車でも寝台車でも、講演会の演壇といわず博物館の応接室といわず、いたるところに見られた。）

三人のうち二人は通訳で一人は作家である。二人の通訳のうちの一人は女性で、陳蕙娟さんといい、東京の恵泉女学院卒業で終戦後二年に中国へ帰るまでずっと日本で育つたということであるから日本語は達者である。野上弥生子さんの『私の中国旅行』にも登場する。もう一人の通訳は男で、これまた日本語がおそろしく流暢で、とりわけ大阪弁で、

「えらい疲れはつたでしょう」

と聞かれたのにはいささか肝をつぶした。わけを聞いてみると、戦時中、大阪の十三の労働者街に住んでいたとのことであつた。この人がさきの陳女士をつかまえて、

「チビさんや」

というと、陳女士は口をとがらせて、

「みんな私のことをチビ、チビっていうんでゲッソリしちゃう」

これでは日本にいるのか中国にいるのか、わからなくなる。

この二人のほかの一人は作家の李英儒氏である。中国作家協会の会員で、わざわざ北京から私たちを迎えに派遣されてきたとのことであつた。今度の旅行中はずっといっしょに同行される由。この人には最新刊の著作があり、それは『野火と春風は古城にたたかう』という題で、抗日戦をテーマにしたものだそうである。彼は駅舎の二階で食事するとき、

「私たちはこれからさき一家の人間ですから困ったときは何でも相談してください」といった。

(李英儒氏は大男だが寡黙慎重で、大まじめな誠実そのものといった顔つきでしばしばとんでもないギャグをとばし、私たちを笑わせた。私たちは彼の枯れた風格になじみ、敬愛をおぼえた。著書は一一〇万部売れ、劇にもなり、ロシア語にも翻訳されようとしていたが、彼は自分の本があまりたくさん売れることを恥じて、あまり語ろうとしなかつた。心臓が弱くて、北京郊外の万寿山にのぼったとき写真をとろうとして絶壁のふちにたたせると、真つ蒼な顔をして目をギュッと閉じた。しかし、あとで、彼は抗日戦中、山西省で大隊長をしていたと聞いた。四十日間の旅行中、ずっと寢食をともにして暮した。篤実な風格には忘れ難いものがあつた。)

ゆるやかな丘と水田地帯を汽車は走つた。丘はまるい背を半ば起した姿勢でうずくまり、青草や疎林に蔽われている。木の幹はまだ細くて、背が低く、植林してから数年ぐらいにしかないことがよくわかる。草も短い。ところどころすりきれたように赤土が露出している。お

そらく解放前は不毛の赤土の荒野だったのだろうと思う。ときどき遠くの丘のかげに村があらわれては消える。土壁にかこまれた塊村である。匪賊監視のための望楼もある。水牛が水浴びしている。子供が手をふっている。沿線の村や町の、壁といわず屋根といわず、いたるところにスローガンが書いてある。「偉大的中国共産党万歳」とか、「毛主席万歳」、「大躍進人民公社」、「人民公社是天梯」といったものである。家がなくてどこにも書けないとなると、川の堤防の草を刈ってそこへ石をならべて字にしているものもある。もっとも、なかにはこんな勇猛熱烈なのばかりではなくて、線路のそばに、「同志よ、レールのよこで恋愛をしてはいけない」などとノタくっているものもある。とにかくこうやたら大人にお株をとられたのでは子供が落書できなくて閉口しているだろうと思った。

広州の駅には午後三時頃ついた。この街は土が熱い。自動車で走っていてもその熱が体のまわりにむんむんおしよせてくる。舗道は堅固で立派なのだが、そのコンクリートの皮のしたから熱がたちのぼってくるようだ。空気には異様な匂いがこもっている。熱い油鍋の匂いのようなもあるし、燻製ソーセージの匂いのようなもある。そのなかを人びとは男も女も子供もはだしで歩きまわり、「城市人民公社祝賀成立」のプラカードを持った一隊が銅鑼や鐘をがんがん、ボンボンと鳴らしてゆき、上潮時の珠江は黄濁した水をみなぎらせてひろがっている。起重機が唸り、子供が叫び、どこかでレコードがはげしい調子でうたっている。清朝時代、民国時代あたりに諸外国の植民地資本が建てたおびただしい石造建築がのこっていて、フランス風の薔

薇窓、近東風の回廊、オランダの破風や尖塔、イギリスの銀行などといった調子の多種多様な混合が街路を特徴づけている。はげしい陽射しをさけるために人びとは回廊式になった歩道を歩いている。柱のかげで子供が一人、歩道に頬をくつつけて、まわりの騒音や足音にもいっつかまわず昼寝していた。

夜はレセプションがあった。先方の出席者は哲学者、作家、文芸評論家、詩人、劇作家といった人たちである。野間宏氏が声明を読んだ。これは昨夜、日本を出発するとき、文芸家協会の歓送会の席で読んだのと同文のものである。要約すると重点はつぎのようになる。

- 1 安全保障条約絶対反対。
- 2 五月一九日夜から二〇日朝にかけての議決は無効である。
- 3 国会は解散させなければならない。
- 4 岸信介を退陣させなければならない。
- 5 日中国交回復を一日も早く計りたい。

これらの諸点をくわしく説明するために、国民の反政府感情の急速なひろがり、とりわけ岸信介の国会破壊活動のこと、その経過、および、これに対する反撃運動の模様などを具体的に詳述した。

それが終ると、つぎに中国側が所信を述べた。作家協会の広州分会長の立場にある人で、哲学者ということであった。やせて、すこし猫背で、温顔の、白髪のお教授であった。その声明

内容を要約するとつぎのようである。

1 過去のことは水に流したい。既往は問わない。過去の日本の中国に対する非行は忘れる。軍閥帝国主義者と日本人民は別である。われわれはむしろ安全保障条約によって日本の軍国主義が復活する新しい現実のほうをはるかに重視するものである。

2 ファシスト岸信介はアメリカ帝国主義者と結託した売国奴である。岸信介を倒さねばならぬ。

3 アメリカ帝国主義を倒さねばならぬ。

4 アメリカ帝国主義は張り子の虎(こけおどかし)である。

5 日本の人民の抵抗運動には深い敬意を捧げたい。中国人民は無限の精神的支持を日本人民に送りたいと考えている。

6 アジア、アフリカの後進国諸民族は各地で植民地主義、帝国主義の鎖を切って烽火をあげている。日本の完全な独立も遠くないことと確信する。

7 日本は孤立しているのではない。人民感情は国境をこえて握手しているのである。

8 ファシズムに対しては国際統一戦線をつくってたたかわねばならない。

9 みなさんのよい旅行と健康のために、乾杯。

このあと酒と食事がはじまった。何人ともなくたちあがって長短さまざまの演説をし、何杯となく乾杯した。内容はすべてさきの老哲学者とおなじである。口調に表現の相違があるだけで

ある。演説をしない人たちも象牙の箸で食卓の魚や肉を選びとりつつ交わす話はことごとく「安保反対」と「打倒アメリカ帝国主義」につきていた。会話のなかで引用される文章はマルクスやレーニンの論文、毛沢東の哲学論集などからとられる。すべての会話がブーメランのようにならざるを得ない。この「張り子の虎」をたたいてから、ふたたび乾杯と拍手とともにそこへもどるのである。またこの人たちが日本の政界についての知識の該博精緻なことは呆れるばかりで、たとえば岸、池田、河野、松村、石橋、三木、浅沼、鈴木といった各派の力の均衡状態と分布状況、各人の言動とその背景の動機についての分析と想像はつくづく私を恥じ入らせ、尻ごみさせてしまった。彼らの問いに対する私の知識の貧寒な物置小屋はたちまちからっぽになってしまった。しかも私があたえた答えはほとんど彼らが知りぬいてしまった。この人たちは文学者なのだろうか。対日問題専門研究家なのだろうか。それはいずれ日を追ってわかるだろう。けれど問題は私自身にある。「文学と政治」というようなところへゆくよりずっと手前の、ごく常識的な、一人の生活人としての常識としての問題だ。つまり、あまりにも私は日本を知らなさすぎるのだ。

五月の中旬頃に「抗美援朝日」週間がひらかれて、中国全土の諸都市で大集会がおこなわれた。そうである。安保反対の抗議集会である。北京では一二〇万人、上海では一七〇万人集ったということである。広州では土砂降りの雨のなかをもとの国民党の死刑場だった広場に六〇万人が集って叫んだという。それは「安保反対！」である。哲学者は微笑して、過去のことは水に